

保・幼，小の連携を充実させるための 具体的な取組の在り方

－「育ちや学びの連携カード」をもとにして－

芝井 豊明

就学前の教育と小学校以降の教育との間には、「必要以上の段差と相互理解の不足がある」と指摘されている。この問題の解決に向けての具体的な手立ての一つとして、昨年度「育ちや学びの連携カード」づくりを提案した。

本研究は、研究協力員の先生方の協力を得て行った「育ちや学びの連携カード」の運用や改訂を通して、「育ちや学びの連携カード」の可能性や問題点等を探り、保・幼，小の連携を充実させるための具体的な取組の在り方を示そうとするものである。

第1章 保・幼，小の連携の充実と 「育ちや学びの連携カード」

第1節 保・幼，小の連携の充実に向けて、 どのように取り組まれているか

保育所・幼稚園から小学校への移行に際して、子どもの成長・発達は連続しているにもかかわらず、保・幼，小の間には「必要以上の段差や相互理解の不足」があるのではないかと指摘されている。平成13年に文部科学省より発表された幼児教育振興プログラムによって各地で、保・幼，小の連携に向けての取組が一層盛んになってきている。しかし、取組の在り方については模索が続いているようである。各地で、保・幼，小の連携に向けての具体的な取組や提言がなされている。

第2節 「育ちや学びの連携カード」の提案

昨年度提案した「連携カード」は、一人一人を大切にしたい教育を進めるための保・幼，小間での情報伝達の具体的な手立ての一つであるが、「連携カード」を共有するプロセスにも意義がある。相互の取組に対する理解を深め、「共通の言葉」を獲得し、子どもや互いの教育の在り方について語り合えるような間柄が築かれることも期待されるからである。

第2章 「育ちや学びの連携カード」

(平成17年度版)運用の試み

第1節 「連携カード」運用の試み

研究協力員の先生方の協力を得て、「連携カード」の運用を試みた。その内、4名の子どものための「カード」について特に詳しく分析・考察を行った。

第2節 「連携カード」運用の試み 26枚の「カード」から

上の4名も含め、すべての「カード」を元にした分析・考察を行った。

第3節 運用によって見えてきたもの

<<「自由記入欄」の4項目に関して>>

育ちや学びを入学前にさかのぼって知る資料の一

つとして、具体的な内容(特に小学校でも継続した指導が必要とされる事柄)が、それを受けた小学校での指導に生かされるであろう。また、「子どもの姿の視点別記入欄」(視点別記入欄)では表せない、必要な情報を記入するのに重要な欄である。

<<「視点別記入欄」に関して>>

比較的簡便な方法で子どもの姿が表される。六視点の点をつないだ六角形を見て大まかにとらえ、さらに、形の特徴から個々の子どものよさや課題に目を向け、指導の在り方や手立てを探る手がかりの一つとすることができる。また、時期をずらして比べることで変容等をとらえる手立てともなる。その子に個別的な特徴的な姿はその子の理解を深める上での貴重な情報となるが、あまりに個別的な姿を観察する項目に挙げると、多くの子どもには観察され難い姿となり、評価も難しくなる。また、人とのかかわりの広がりを見る工夫を凝らす必要がある。

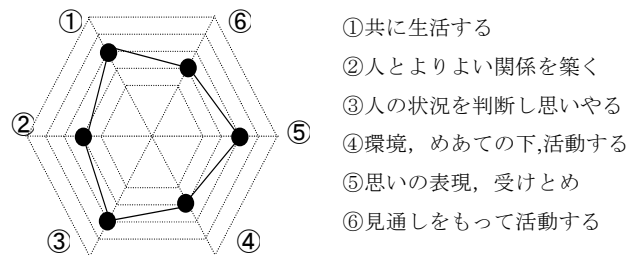


図1 六角形で表される「視点別記入欄」の一例

<<その他>>

「自由記入欄」と「視点別記入欄」を併用することでより子ども理解が深まっていく。また、六角形の違いに注目することは、幼稚園と小学校の相互理解を深めたり、指導の在り方を探ったりする手がかりになる。さらに、何を伝えたいのか、何を求めているのかを話し合うことで、よりよい「連携カード」が創造される。

第3章 改訂版「育ちや学びの連携カード」

第1節 「連携カード」の改訂に向けて

隣接する京都市立の幼稚園、小学校よりそれぞれ2名、計4名に、研究協力員として協力を依頼した。膝を付き合わせた話し合いの場となった。

第2節 改訂版「連携カード」

第2章及び、前節の研究協力会議での話し合いを参考に、「連携カード」の改訂に取り掛かった。主な改訂の視点を挙げる。

＜＜「自由記入欄」に関して＞＞

興味・関心、得意分野、苦手分野、留意事項等についての記述は、子どものよさを伸ばしたり、指導場面で生かしたり、不安や戸惑いからつまづきが生じないようにしたりするための貴重な情報となる。その子の特徴、その子らしさといった情報は一人一人を指導する上でのかぎになる。

＜＜「視点別記入欄」に関して＞＞

普段の生活の中で比較的、日常的に容易に見受けられる子どもの姿を取り上げ、観察、評価する欄とする。一つの「子どもの姿」から子どものよさや課題は様々に読み取れる。また、同じように見受けられる子どもの姿でも、子ども一人一人によって見えてくる課題は様々である。さらに、一つの姿からプラス面とマイナス面の両方の要素を読み取ることができる。

人とかかわる力、社会性については、誰との間で見られる姿か、見られない姿か、かかわりをもっている集団の規模はどれくらいか、また、可能な限り家庭等における姿についても、子どもたちの課題の背景として把握しておきたい。

子どもの一つの姿は、他の姿と関連付けて考察することでより理解が深まっていくと考えられる。そのためには「視点」の配列を工夫することが望ましい。また、それぞれの姿からどんな内容を読み取りたいのか、主な評価の観点を示すこととする。

＜＜その他＞＞

以上を踏まえて改訂版「育ちや学びの連携カード」を作成した(資料3)。

そして、それをを用いて研究協力員の先生方といくつかの設定の下、シミュレーションを行った。活発な発言が続いた。

誰とのことが多いですか						
自分 1人	家 族	先 生	気の合う 友達(人)			大抵 の 友達
			1	2	~5	
○		○	○			

図2 改訂版によるシミュレーション例(部分)

第3節 改訂版「連携カード」の運用

シミュレーションによって、改訂版の特長や運用の在り方が明らかになった。

比較的、日常的に多くの子どもたちに観察され易い「子どもの姿」から、子どもたちのよさや課題が様々に読み取れる。また、一見同じように見える姿からでも、子どもによって随分異なる読み取りもできる。さらに、プラス面、マイナス面の両方が読み取れる。つまり、個別的、特別な姿からでなくてもこの「カード」で一人一人を個別的にとらえることができることを示している。個別的、特別な姿も併せて活用したい。

また、子どもの姿から様々に読み取れるということは、子どもの「よさをとらえて伝える」ことに加えて、子どもの姿を「よさとしてとらえて伝える」視点をもって子どもを見ていくことにも共通理解が図られたのではないかと考える。



図3 研究協力会議の様子

文字通り研究協力会議は膝を突き合わせた話し合いの場になった。筆者は研究協力員の先生方の中で使われている言葉にずれが見られるかどうかにも関心があった。これまで、相互理解の妨げとしてとらえてきた、ずれのある言葉も時に相互理解を深めるきっかけとすることができるし、それを意識し、話し合うことで相互理解が深まっていくと考えたからである。改めてこれは「共通の言葉」であるといった確認はなかったが、「カード」を真ん中において子どもたちのために実のある連携をして行こうとする前向きな姿勢が双方にあり、大きなずれや誤解といったものは見られなかったのであろう。むしろ、親和的な雰囲気が生まれた。「カード」は子ども理解を深め、連携を充実させるための手立ての一つとなると考えるが、単に「カード」の受け渡しだけでなく、このような膝を突き合せた話し合いも併せて行う必要がある。